

# 設楽発掘通信

No.47  
令和元年  
6月号

## 今年度の発掘調査が始まりました

いよいよ、六月三日から上ヲロウ・下ヲロウ遺跡と石原遺跡の発掘調査が始まりました。本発掘調査A（いわゆる範囲確認調査）をおこなった大空前遺跡はすでに調査が完了し、今後さらなる調査についての検討が行われる予定です。一方、万瀬遺跡はやや遅れて始まります。万瀬遺跡には、今年度から埋蔵文化財センターの調査研究員となった若き考古学者が担当します。

皆さま初めまして、今年度から愛知県埋蔵文化財センターで勤務することになりました河嶋優輝と申します。長年暮らした愛知県における埋蔵文化財の調査に縁あって携われることは、望外の喜びであると共に身の引き締まる思いでもあります。今年度は発掘調査を実施する万瀬遺跡の担当となっておりますが、大空前遺跡における範囲確認調査にも参加しました。設楽ダム関連遺跡における発掘調査はこれまでに参加したものに比べて規模も大きく、民間業者の支援を受けるものであるなど、以前経験した大学や市町村の主導による発掘調査とは勝手が違うこともあり、覚えなければならぬことも多くありますが、調査への貢献を果たせるように努力する所存です。

大学では古代日本、主に飛鳥時代を中心とした時期の仏教寺院の研究を行っていましたが、実際の調査現場ではその他の時代の遺物が出土することが多く、またその種類も多岐に亘ります。設楽ダム関連遺跡では特に縄文時代に属する成果が顕著ですが、後期旧石器時代の石器から中世の陶磁器など多彩な遺物が出土しており、今年度私が担当となった万瀬遺跡でも、既往の調査では縄文時代の遺物から中近世の建物の遺構までが確認されています。今年度の調査でも様々な時代の成果が上がるのが予想されますが、これを機会と捉えて、より広範な時代の遺跡に対応できるように努めます。どうぞよろしくお願いたします。

（愛知県埋蔵文化財センター 河嶋優輝）



写真1（右上） 表土掘削



写真2（右下） 土の堆積状況を観察



写真3（左上） 範囲確認調査状況

# 川向東貝津遺跡の室内整理調査について

現在、弥富市の埋蔵文化財センター本部では、小松地区の笹平遺跡および川向地区の川向東貝津遺跡の室内整理調査が進められています。笹平遺跡は、今年の四月から作業が始まり、現在、出土遺物の分類や接合などの作業を行っています。一方、川向東貝津遺跡については、昨年度から室内整理調査が継続しており、次第にその成果もまとまりつつあります。

この遺跡に関しては、後期旧石器時代から縄文時代草創期と、古い段階の石器群が多量に出土したことで、これまでの「設案発掘通信」でも、何度かご紹介したと思います。川向東貝津遺跡では、それ以外に、縄文時代早期前半（今から約一萬年前）・中期後半（今から約五千年前）・後期初頭（今から約四千四百年前）の、土器・石器が出土しています。竪穴建物跡や埋甕といわれる土器埋設遺構が見つかるなど、特に縄文時代中期後半から後期初頭にかけての集落跡は良好な状態で見つかっています。ここではそのような集落跡から出土した縄文土器の整理調査について、ごく簡単に紹介します。

縄文土器は、器形や文様、さらには胎土からおおよその時期が分かるため、可能な限り分類をして、土器片ごとに記録をとっていきます。それと同時に、破片同士の接合作業を試みます。各土器片には発掘調査時に出土場所の記録がとつてあるため、同一土器でも、それぞれの破片がどのように遺跡のなかに存在していたかを、実証的に追究できるのです。器形が大きくつながるものは、さらに全体が分かるように復元をしていきます。

これらの作業を行った上で、特徴的な土器を中心に、実測作業を行います（写真4）。この作業は、資料を詳細に観察して、寸法を測り正確に作図するものです。実測作業は、整理調査の中でも、最も考古学的な検討を要する作業の一つといえます。どのように作られたのか、どのように使われたのかなど、残された痕跡から探っていく、図面に表していきます。いろいろな方向から見た図面に加えて、断面図なども組み合わせます。製図用の鉛筆などで作図される場合が多いため、報告書に掲載する際には、トレースという清図作業を行います。最近では、これをパソコンで行うことが多くなりました（写真5）。

図1に示したのは、土器埋設遺構に使用された土器です。連続する「J」字の縄文を特徴とする深鉢で、縄文時代後期初頭に属するものです。底部が欠損していますが、埋められるときに当時のヒトが意図的に欠かしたものと考えられます。口縁部に二ヶ所ある小さい孔は補修孔と呼ばれるもので、この土器が大事に使われていたことが分かります。

このような室内整理調査を経ることによって、学術資料としての体裁が整えられ、発掘調査成果の報告・公開が可能となります。

（愛知県埋蔵文化財センター 川添和暁）

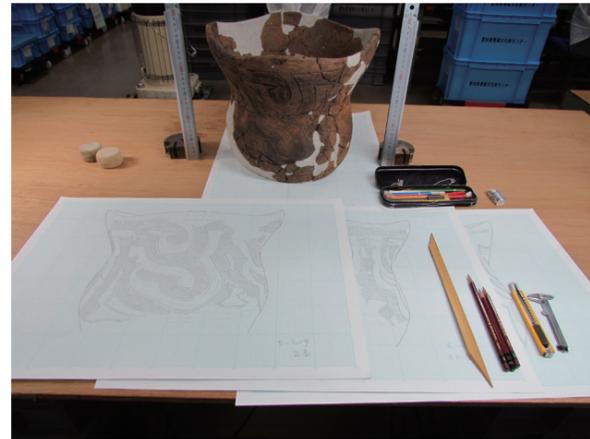


写真4 土器実測の様子

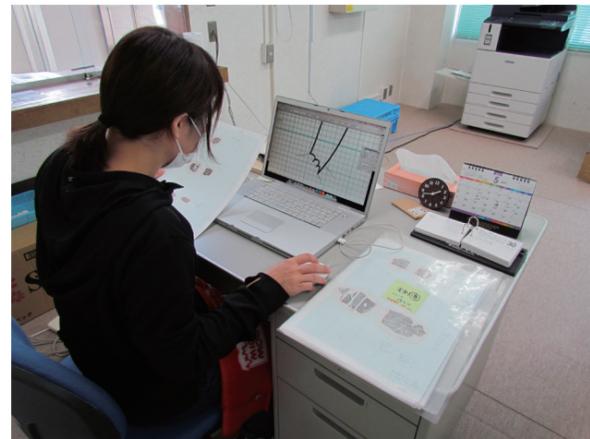


写真5 遺物図面整理・トレース作業の様子

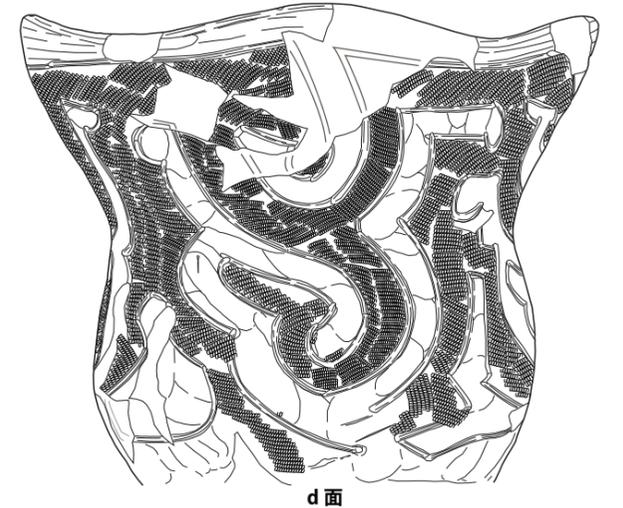
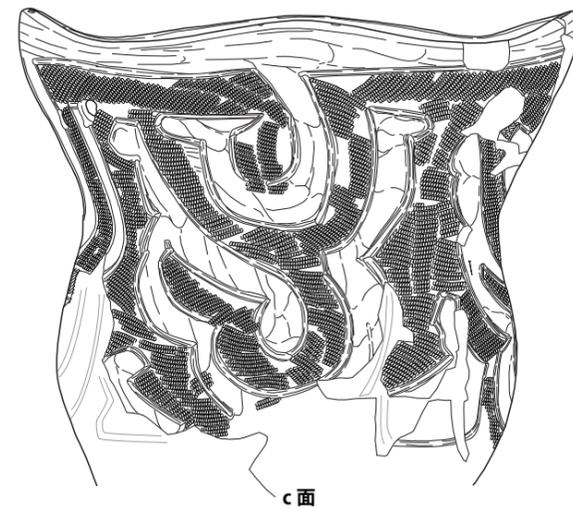
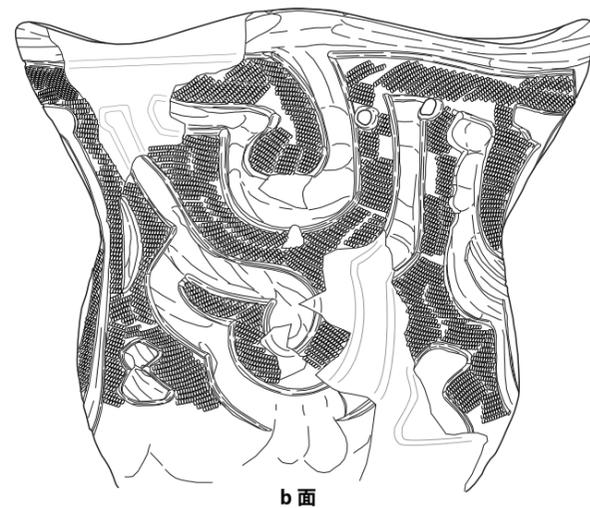
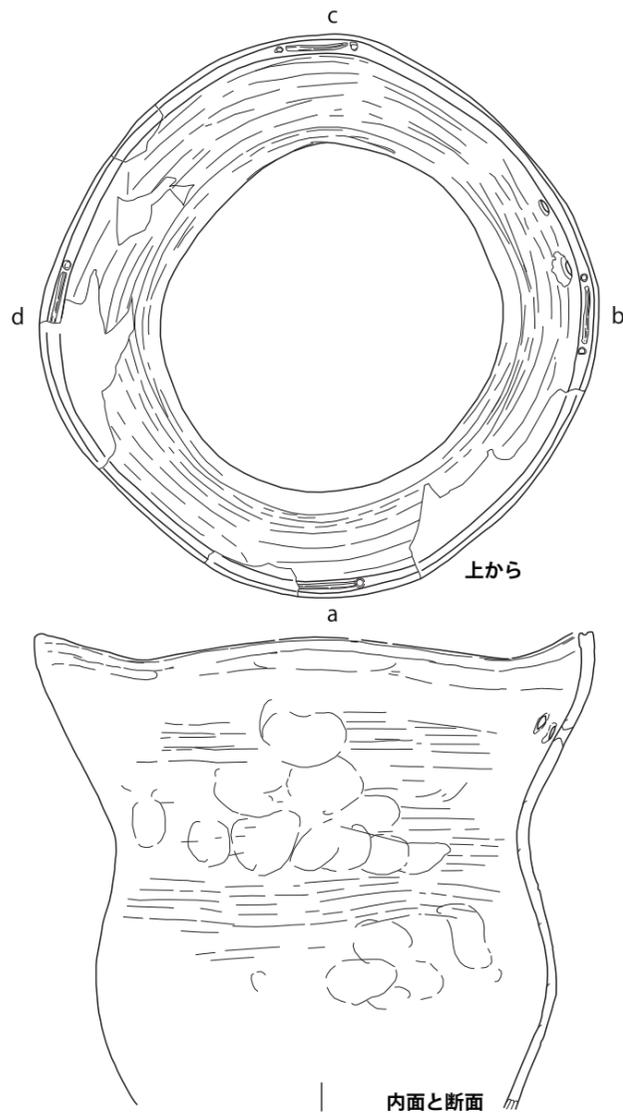


図1 川向東貝津遺跡出土 縄文土器実測図

## 大空前遺跡の調査

令和元年度最初の調査として、川向地区の大空前遺跡の本発掘調査A（範囲確認調査）を五月十六日から二十四日の間で行いました。今回の調査は三千三百二十二㎡の対象面積内に二十ヶ所、小さいもので一m×二mの試掘坑を重機や人力で掘り下げました。この本発掘調査Aでは、それぞれの試掘坑で堆積している土を観察して、遺跡の範囲や調査面の深さ、遺構・遺物の有無などを確認します。また、現在は町道が敷設され、周囲は茶畑や植林地として利用されていたこの地域の成り立ちや、昔の地形を推察します。

当初、これまでの調査で見つかっている古代以降の遺物や遺構が確認されることが期待されました。しかし、実際に調査を行ってみると、明確な遺構は検出されませんでした。町道北側緩斜面の試掘坑からは、縄文時代の打製石斧二点と剥片、縄文土器片が出土しました。

出土した打製石斧の一点は、完形品で長さが十・三cm、幅が五・四cm、緑色片岩製です（写真9左）。もう一点は、半分欠損していて長さ五・七cm、幅四・三cm、安山岩製です（写真9右）。打製石斧は主に土掘り具に使用されていたと考えられている道具です。当時、周辺で生活していた人々が陥し穴や



写真6 TT002 調査状況 南西から



写真7 TT011 調査状況 南西から



写真8 TT014 調査状況 北東から



写真9 打製石斧

竪穴建物の掘削、根茎類の採取などを行っていた様子が想像できます。また、町道南の試掘坑からは中世以降の陶磁器類や土器片なども出土しています。（愛知県埋蔵文化財センター 永井宏幸 協力 株式会社イビソク）

# 設楽発掘通信

No.47 令和元年6月号

編集・発行

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24

電話 (0567) 67-4161 【管理課】 4163 【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

Twitter [https://twitter.com/aichi\\_maibun](https://twitter.com/aichi_maibun)

\* 本誌に関するお問い合わせは愛知県埋蔵文化財センターへお願いいたします。

印刷・協力

株式会社イビソク